エッセイ

１４の瞳

SCE・Net 小林 浩之

E-34

発行日
2012.06.24

５８年前の春（1954 年）と３年前（2009 年）の春、私は同じ場所で同じ女性と会っていた。

５８年前の福岡県嘉穂郡大分（だいぶ）村は、今の福岡県飯塚市大分である。当時も今も落ち着いた筑豊盆地の壁をなす山群の麓の山村である。

私にはあの壺井栄の「２４の瞳」に重ねていた一つの思い出がある。

５８年前、１４の瞳を持った７人の男子中学生徒は先生の家を訪ねることとなった、その時は、喘ぎながらも、心地よく、自転車のペダルを踏んで、小川沿いの坂道を登ったのである。私達は、中学一年生。お訪ねした女性は田中裕子先生で、福岡女子大を卒業された先生は、卒業と同時に飯塚一中に赴任され、入学したばかりの私たちのクラス担任となられた。勿論若く、背が高く、スリムな容姿をされた清楚な女性であった。清純で、初々しい先生は、悪がき達の絶好の標的であった。よく好意を感じる女の子に男の子が意地悪をするというのがある。その話に似ていたかもしれないが、ことを作っては、苛めた。そのとき、まさに〝泣き味噌先生〟であった。

すぐに、騎士団が現れる。先生の担任クラスの中の７人の男子生徒が、早速、先生の親衛隊となる。悩んでおられる先生に元気になってもらいたいという大人の気持ちに加えて、説明できない恋心からである。私は、その７人の親衛隊の一員に名をつらねた。初恋は幾つもある。幼稚園の初恋、小学校でのそれ、中学校でのそれ、高等学校でのそれ、大学でのそれもある。就職してからのそれもある。長ずれば、淡い恋心と言っても良い。その一つであったろうと思う。

まもなく、このメンバーの中で誰が発案したのかは覚えていない。先生に誘われたのかもしれない。“先生の家に行こう。（元気付けよう。）”ということになった。

先生のお宅は当時は人も容易には通えぬ大分村という山村にあった。奥には、内住峡といわれる小さいが険しい沢のある峡谷につながる川沿いの集落で、さらに言えば下流には飯塚市の水がめである久保白ダム（以前の内住ダム？）を控え、一方、上流方向に、さらに上ると、三郡山系を越えて大宰府にいたる。そのような場所で、とにかく当時は　飯塚の炭鉱地帯を囲む筑豊盆地を形成する山系の麓に位置する恐ろしく田舎であった。今はモータリジェイションのおかげと、福北ゆたか線の電化もあって、福岡のベットタウンの一部となっている。地図を添付するが、当時は八木山バイパスといわれる自動車道もなく、篠栗線（後の特急「魁皇」号で有名な福北ゆたか線となる）も開通していなかった上に、自転車でさえ、商用以外には、それほど普及もしていない時代であった。

集合場所は天道駅前の呉服屋である。天道（当時は嘉穂郡穂波町で現在は飯塚市）の３人組が自転車を借り集めてくれた。飯塚市街から、天道までは４ｋｍくらい歩いていったと思う。それから約７ｋｍというところである。
それから、必死になって、自転車を漕いだ。山道は上りで、小石交じりの土道である。何度か休憩を挟みながら到着したのは呉服屋を出て２時間近くになっていたと思う。レンガ塀の大きな家であった。先生と先生の母上の暖かい迎えを受けて、先生の母上が昼ご飯をつくってくれた。何を食べたか覚えてはいない。美味しかったという記憶が残っているだけでなく、皆一様に感激したのはよく覚えている。

2 年生になるときクラス替えがあって、それ以来、先生とは、縁が切れた。当時、飯塚一中には 1 学年 16 クラスで 1000 人もいたから、先生も生徒もその面識を保つのもむつかしかったのであろう。

「24 の瞳」では小豆島の岬の分教場が物語の最初の舞台である。男 5 人、女 7 人の生徒であった。黒木瞳のテレビドラマは見なくても、木下恵介が高峰秀子と描いた「24 の瞳」を記憶されているか方は多いと思う。壺井栄の物語は戦前に始まり、再会は戦後になる。反戦を訴える物語になった。私達の話は戦後、筑豊の石炭景気が、まだ、盛んな時である。物語の展開は違ってしまった。「14 の瞳」の男 7 人のメンバーは、高度成長と言うこともあったが、やがてくるエネルギー革命による石炭産業の衰退によって、全国に散った。すでに鬼籍に入った者もおり、一人は消息が知れず、飯塚に残っているのは特定郵便局局長をやっていた一人だけとなった。集合場所に選ばれた天道の呉服屋は、今はもう無くなっている。

私は恐らく大石先生を演じた高峰秀子が田中裕子先生に重なり続けたのかもしれないが、何故かこのことが、ある時から、気になり始めた。先生に再会したいと思った。ただ、手立ては容易ではない。消息すら掴んではいないのでだから。しかし、やがて、実現することになる。

そのようなことを、年を経て付き合うようになった大分中学出身の女友達に漏らしていたら、「私は知っている。今も元気でいらっしゃる」と言う。そのお酒と食事の友達で高等学校同期の女性が案内してくれると言う。３月３１日、桜のなか、今度は先生に再会するために、その女友達の車に乗せてもらって訪ねた。最初にお会いして５５年後（2009 年）のことである。今度は小一時間である。道は狭くて軽快なドライブとは行かなかったが、あっという間に着いた。家宅には、昔の面影が残るが、建て替り、レンガ塀はブロック塀となっていた。家を訪ねた後、春の光が眩い中、近くの見事に満開に咲いた一本桜の下でしばらく語り合った。先生は結婚後も教師を続けられたが、ご主人を先になくされ、自分の実家に、一人暮らしとのことであった。息子さんが行橋で高校の教師をしていて、時々たずねてくれると言われていた。お年はそのとき７７歳のはずであった。数年前骨折をされたと言うことで、少し足は不自由に見えたが、まずはお元気なことに安堵した。私は今はもう〝泣き味噌先生〟なんかでない熟年の女性に、昔の美しい面影をはっきりと見ることができた。けれど先生は私について、おぼろであったらしい。

これは中学時代、男の生徒が若い女教師にときめきを感じると言う初恋の一つというべき物語である。

当時の写真は２枚だけ残っている。屋外で使う朝礼台に寄りかかる先生を中心に親衛隊の男の子がかこんだ写真と板張りの教室の外で、先生が、これも男生徒に囲まれた写真である。何故か、同級の女生徒は写っていない。

写真が増えた。満開の一本桜の下で撮った先生とのツーショットである。
後日、その写真を同封した私の手紙に対しての返事には、こう書いてあった。「名前まで見て、はっきりと思い出しました。おとなしくてお利巧さんの子供は印象が薄かった。」と。

完全な片思いではないか、親衛隊に参加し、彼女を守ってさし上げたと思ってから５５年間、いつかはお会いしたいと思いを募らせていたのにと思ったが、同時に、これで思いを晴らしたという充足感も強かった。平成２１年の春のことである。

そんなものかもしれない。人生は片思いや、思い込みの連続だという気もする。

当時、多分、先生も少なくとも筑豊本線の桂川駅までは、自転車を使われたはずである。帰りの登りの坂道で、どんな思いをされていたのだろう。僕らの思いは、少しは力になったのだろうか。

後日談がある。東京に住んでいる当時の親衛隊長Ｔ君は私の話の後、先生のところを尋ねたという。曰く“俺のことはすぐわかっとんしゃったぞ”と。
慕う生徒は他のクラスにもいた。このことを自慢げに話したとき、Ａ君は“俺も行った。母上の食事がうまかった。俺も好いとったと、けど、俺はお婆ちゃんになったに女に、今更、会いとうもないと”と照れてもみせた。実は、１４の瞳だけではなかったのである。

初恋は片思いに限る。

おわり

以上。